

三重県亀山市教育委員会 完了報告書

1. 調査研究概要

小学校の新学習指導要領の実施に伴い、第3学年から第6学年までの年間標準授業時数がそれぞれ35単位時間ずつ増加する。児童、教員に大きな負担をかけることなく、授業時数の増加に対応するため、児童や学校、地域の実態を踏まえた弾力性と恒常性のバランスのとれた時間割編成、児童の学びの質の向上に関する調査研究を行う。

平成29年度は、市内の4校を実践校において、第3、第4学年では国語科、第5、第6学年では外国語科で短時間学習を設定し、教育的効果を高める指導計画・方法の工夫や教材の在り方について調査研究を行った。教育委員会が、指導計画を作成し、短時間学習で活用するための教材を提供することで、教員に過度な業務負担をかけることなく、4校とも実践をすすめることができた。また、週3回15分の短時間学習を設定したことで、繰り返しの学習が、学習内容の定着につながった。その一方で、反復学習のため児童の意欲を持続させることに難しさがあること、教材の量や内容について短時間学習に適したものに改善する必要があることが、課題であった。

平成30年度は、平成29年度の課題を踏まえ、短時間学習の効果をより高めるための指導計画、教材の作成について研究を行う。実践校4校での成果や好事例は、市内の全小学校に共有し、英語教育の先行実施をスムーズに進めていく。外国語科については、今後行われることになる「話すこと」のパフォーマンス評価の評価方法についても研究を行う。

2. 調査研究の内容

2-1 調査研究の内容【実践校4校共通】

(1) 時間割編成の在り方

前述の実情を踏まえ、45分授業のコマは増やさず、3・4年生では国語科において、5・6年生では、外国語活動・外国語科において、朝の時間帯に短時間（15分）の授業を実施する。

短時間15分は、週3回を教育課程内の時間とする。残りの2回は教育課程外とし、朝学（補充学習等）に充てる。

なお、学校全体の共通時間割とするため、該当外の学年については、朝学（補充学習等）に充てる。

	短時間学習を実施した曜日・時間帯	その曜日、時間帯を選んだ理由
亀山西小学校	1回15分を週3回 火・水・木曜日 朝の会→短時間学習→1限目	月曜は振替休業日などで実施できないことがあるため。 昨年度の2学期まで火・水・木曜日に国語の補充学習を行っており、児童のリズムを崩すことなく、スムーズに短時間学習へとつなげることができると考えたため。
亀山東小学	1回15分を週3回 曜日の指定なし 担任の裁量で曜日を決定。 朝の会→短時間学習→1限目	短時間学習の15分全てを学習にあてられるよう、1時間目の授業を行うにあたって教室移動や授業前の準備が必要ない曜日を選ぶため。

川崎小学校	1回15分を週3回 火・木・金曜日 短時間学習→朝の会→1限目	月曜日は、休み明けの子どもの様子を丁寧にみとる必要があるため。 月曜日にその週の短時間学習について学年での打ち合わせや授業準備を行う時間を設定するため。
関小学校	1回15分を週3回 火・水・金曜日 朝の会→短時間学習→1限目	月曜は振替休業日などで実施できないことがあるため。 連続して設定しないことで、児童が英語にふれない時間をできる限り短くするため。

(2) 教科

【3・4年生国語科】

本市では、平成29年3月に改訂した、「亀山市学力向上推進計画」をもとに、「書く力」の育成を軸とする学力向上に取り組んでいる。そこで、週7コマある国語科の1コマ分を15分×週3回の短時間学習とし、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項を短時間学習で扱い、「書く力」の土台となるスキルの向上を目指している。

短時間学習では、教育委員会が作成したワークシート、指導計画、学習プランにそって学習を行う。ワークシートは、1枚に短時間学習1回分の内容を入れて作成している。

また、6月、12月と2度の検証テストを実施し、短時間学習における学習の定着状況、効果を検証する。併せて、第3、第4学年の担任に、教員アンケートを実施し、教材や指導計画、短時間学習の学習効果について、検証を行う。

【5・6年生外国語活動・外国語科】

外国語の定着を図るためには、児童が英語に多く触れる機会を設けることが大切と考える。そこで、週2コマの外国語活動・外国語科のうち、1コマ分を15分×週3回の短時間学習とする。

教育委員会が作成した年間指導計画をもとに学習を行う。年間指導計画は単元のはじめは「聞く」「話す」を中心とした活動を多く取り入れ、単元終わりには、「読む」「書く（書き写す）」となるように作成した。

昨年度の短時間学習は、教育委員会が作成した15分用のプレゼンテーションソフトで作成した音声教材を使った学習であったが、児童の興味・関心を継続させることに課題があった。そのため今年度は、児童の実態を理解している指導者が、年間指導計画をもとに活動を選択し、45分の授業と連動しながら短時間学習の効果を高める。選択する活動は、慣れ親しませたい表現を用いて、週に3回繰り返し行うことで定着を図る。

また、6月、12月と2度の検証テストを実施し、短時間学習における学習の定着状況、効果を検証する。併せて、第5、第6学年の担任に、教員アンケートを実施し、教材や指導計画、短時間学習の学習効果について、検証を行う。

2-2 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

(子どもの視点から)

昨年度に引き続き、朝に行う週3回15分の短時間学習を教育課程内に位置づけたことにより、児童は時間増の負担を感じることなく、意欲的に学習に取り組むことができた。

国語科では、1回の短時間学習の学習内容を1枚のワークシートに収めている。1回分の短時間学習の学習内容は45分授業と比べて少ないため、個々の学習の進度に差が生じにくく、スタートをそろえて学習することができている。また、「この短時間学習では何を学ぶのか」が明確で、見通しをもって学習することができる。これらのことが、児童の学習意欲につながったといえる。

ワークシートによっては、15分の学習時間に適していないものもあった。カリキュラム・マネジメント検討会議での各校の実践交流や教職員アンケートの結果を活かし、1枚のワークシートの問題数の見直し、個々の進度の差に対応できる工夫など、ワークシートを改善し、児童の実態に合わせることもできた。

検証テストでは、「文字」「言葉」「文の構成」の3観点で検証を行った。実践校4校の3・4年生とも「文字」の定着率が一番高い。ローマ字や漢字のつくりといった「文字」に関する学習は、短時間学習で繰り返し学習していくことで定着がしやすいといえる。一方、辞書の使い方や文法的な内容を扱う「言葉」「文の構成」の学習については、知識として新しく学ぶことも多く、定着率に学校間の差があった。定着に時間のかかる「言葉」「文の構成」の学習に時間をかけられるよう指導計画を見直すなど、今後も改善をしていく。

外国語活動・外国語科では、「聞く」「話す」を中心に、進めている。新教材やゲームを行い語彙や表現をたくさん「聞く」インプットをし、十分に聞いた表現を用いて、子ども同士のやりとりを行う「話す」アウトプットを取り入れた学習をする。ゲームに楽しんで取り組む中で、自然に語彙や表現の定着が図られた。

検証テストでは、unit quiz (リスニングテスト) と talking time (教員と子どもの面談によるパフォーマンステスト) の2種類行った。

検証テストの結果より、5年生 unit quiz (アルファベットの文字) は80%→86%、6年生 talking time (自分から話す姿) は、26%→58%となり、定着がみられた。

課題としては、ゲームを行うことで語彙や表現の定着は図れたが、子ども同士のやりとりを行う「話す」際、2往復以上のやりとりまでには至っていないため、時間の確保のため曜日や挨拶などは45分で行い、15分は歌やチャンツから始める等、45分の授業と短時間学習の活動内容の選定をし、指導計画の見直しをしていく。

(教職員の負担の視点、校務運営の視点から)

短時間学習で児童の学習効果を高めるためには、45分授業以上に、教員のタイムマネジメント力が必要である。実践校の4校においては、短時間学習が教育課程内であるため、校内で共通理解する機会をもつことができ、週3回15分の学習時間を確実に実施することにつながった。また、短時間学習を続けていくうちに、時間を有効に使うとする教員の意識が高まり、準備時間や指導者の説明時間が短縮され、ねらい達成につながるテンポのよい授業展開が行われるようになってきた。カリキュラム・マネジメント検討会議で効果的な実践例等の情報を共有したことで、より短時間学習が充実したものとなったといえる。

短時間学習にかかわる教員アンケート（外国語活動・外国語科）において、児童の定着について「概ね定着している」95%→68%となり、「定着している」0%→32%と答えている。児童の定着を感じられている教員が増えていることが分かる。

課題としては、ワークシートの採点時間や検証テスト（外国語活動・外国語科）Talking Timeの時間設定等に教師が負担を感じていることが挙げられる。

今後は、採点も含めたワークシートの活用方法の共有や、授業時間内に評価できるよう、評価基準を明確化したり、採点者を固定したりすることを視野に考えていく。

（地域との関係の視点から）

実践校の4校に加え、今年度4月からは、市内全小学校で、短時間学習を実施している。円滑に開始できるよう、保護者や地域などに対して、昨年度末、学校だより等を通じて、短時間学習の意図や、下校時刻、時間割変更などの内容の周知を行った。また、教育委員会が「短時間学習参観期間」を設定し、実践校以外の教員に対して、参観をするように依頼した。併せて、「英語教育先行実施説明会」を実施し、短時間学習の指導計画、教材等について、周知した。

2-3（実践校における年間実施スケジュール）【実践校4校共通】

月	検討会議・学校関係	事務局関係
6月	第1回カリキュラム・マネジメント検討会議 ・委員任命・研究概要・研究協議会内容 ・本研究の検証方法 ・アンケートの実施（教職員対象）	【第1回市教委研究協力員会議】
7月	第2回カリキュラム・マネジメント検討会議 ・研究協議会還流 ・1学期の取組反省 ・2学期の取組提案	【第2回市教委研究協力員会議】
8月	英語キャンプ	2学期年間指導計画・学習プラン・教材作成
9月		先進校視察 (東京都目黒区立目黒小学校)
10月	先進校視察(岐阜市長良西・長良東小学校)	
11月	第3回カリキュラム・マネジメント検討会議 ・2学期の取組反省 ・3学期の取組提案 ・アンケートの実施（教職員対象） 先進校視察 (京都府田原・宇治田原小学校) (岡崎市立六名小学校)	【第3回市教委研究協力員会議】
12月		
1月		
2月	全小英研究発表会(亀山東小) 第4回カリキュラム・マネジメント検討会議 ・実践及び成果と課題交流 ・H31年度取組提案 ・アンケート結果の分析・考察	【第4回市教委研究協力員会議】 H31年度1学期の指導計画・学習プラン ・教材作成

3月	調査研究とりまとめ →市内小学校周知 成果物の完成・送付
----	------------------------------------

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果， ●：課題)

①子どもの視点から

【3・4年生国語科】

- 1回分の短時間学習の学習内容は45分授業と比べて少ないため、個々の学習の進度に差が生じにくく、スタートをそろえて学習することができている。
- 1回分の短時間学習の学習内容を1枚のワークシートに収めている。「この短時間学習では何を学ぶのか」が明確で、見通しをもって学習することができる。
- ワークシートを使っの学習は、スモールステップで、見通しを持って学習できるので、子どもの意欲が高まる。
- ローマ字や漢字のつくりなど「文字」に関する学習は、繰り返し行う短時間学習で定着しやすい。
- 辞書の使い方や文法的な内容を扱う「言葉」「文の構成」については、知識として新しく学ぶことが多く、短時間学習では定着が難しいものもある。定着に時間のかかる内容に時間をかけられるよう指導計画の見直しが必要である。
- 実践校の意見を活かし、学期ごとにワークシートを改善したため、児童の実態にあったものに近づいてはいる。ワークシートによっては、15分の学習内容に適していないものもあるので、今後も見直しを図っていく。

【5・6年生外国語活動・外国語科】

- 繰り返し行うことで、自信が付き意欲的に取り組める。その結果、英語を積極的に話す児童の姿が見られる。
- 15分の流れを導入・活動・ふりかえりとパターン化することで、見通しをもち取り組むことができる。
- 教師からの質問だけでなく、児童からも質問する姿が見られる。
- 友だちとのやりとりの中で、自然にリアクションしながら話をしたり、聞いたりする姿が見られる。
- アルファベットを書く（書き写す）ことに、興味を持ち取り組む姿が見られる。
- 朝からチャンツや歌など声を出すことに躊躇する児童もいる。学級の実態や単元の進度に応じて、音と文字をつなげるために文字を指でなぞりながらSTORY TIMEを聞く、アルファベットの名前を聞いてなぞるなどの活動も提案していく。

②教職員の負担の視点，校務運営の視点から

【3・4年生国語科】

- 言語に関する事項を短時間学習の指導計画に位置付けたことで、今まで以上に指導を丁寧に行うことにつながった。
- 短時間学習で学習したことを45分の国語や書写の授業でも関連させていくことで学習効果があがった。

○時間の枠組みを設定することで、テンポよく授業が進められ、ねらい達成につながる授業展開を行うことができた。

●短時間学習が教育課程内に位置付けられたことにより、これまで朝の学習で行っていた読書や補充学習の時間確保が難しい。

【5・6年生外国語活動・外国語科】

○週に3回英語に触れることで、児童だけでなく、教員のクラスルームイングリッシュの発話量が増えてきている。

○スモールトークのような指導者と児童のやりとりを取り入れることで、既習の英語を使う機会を増やすことができた。

●15分の授業計画を立てるために多くの時間を要する。

●パフォーマンステストの評価基準を共通理解する必要がある。

●同学年同一ペースですすめていくことが難しい。

●指導計画の内容が、「話す」「書く」「読む」「聞く」と内容が多いため、定着が図れない単元がある。そのため、45分は自分のことや気持ちを伝える言語活動の時間、15分は45分授業で学んだ語彙・表現を身に付ける練習時間と、それぞれの時間のねらい明確化していく。

●短時間学習が教育課程内に位置付けられたことにより、これまで朝の学習で行っていた補充学習の時間確保が難しい。

③地域との関係の視点から

○英語ボランティアの方と話す機会は、子どもが自分の知っている英語が伝わった成功体験の蓄積に繋がる。

○フラッシュカードの作成等、環境整備が整う。

●英語ボランティアは交通費も含め、無償で活動している。地域によっては、英語ボランティアの配置のない学校があるため、今後継続して募集をしていく。

④設置者（教育委員会など）の視点から

○市教育委員会が、指導計画、ワークシートを作成することにより、教員の教材作成の負担を軽減することができた。

○カリキュラム・マネジメント検討会議で、実践校の取組を報告する機会をもつことで、効果的な取組を共有、広げることができた。また、課題についても出し合うことで、他校の実践から解決策を見出したり、指導計画やワークシートの改善につなげたりすることができた。

●教材や指導計画が、児童の実態に合っていないところもある。今後も、実践の様子をつかみ、児童の実態にあった指導計画、教材を提供できるように、改善をしていく。